

プロローグ

これはネオジオンとエウーゴの戦いが、ダブリンから宇宙へと移ってしばらく経った頃の話である。

戦線はネオジオン側が制圧範囲を拡大し過ぎた事と、エウーゴ、地球連邦軍の軍備建て直しという双方の事情の為に膠着状態に陥っていた。その為、各地で小競り合いが起きる他は、東の間の平和が訪れていた。

また、ネオジオン側が得た情報によると先日決行したダブリンへのコロニー落しが、当初の予想以上に世論の批判を集めていた。戦争を早期に終結させる為の作戦が、結果的に連邦軍強硬派への格好な戦争継続材料を提供してしまう皮肉な事態になってしまった。

シヤアが彼女の元を去ってからというもの、ハマーンは殆ど一人で全ての事を行わなければならなかった。だがシヤアにミネバを預けたとは言え、対外向けに影武者を立ててまで行動したとしても、民衆の支持が得られない状態では政権が長続きしない事位、彼女自身充分過ぎる程判っていた。ネオ・ジオン内だけならばハマーンの支持は絶大なのであるが、地球圏全体では、やはりシヤアの知名度には到底叶わないのだ。

また、実戦経験が乏しい素人軍人が大半を占めるネオ・ジオンにおいて、彼女一人の背中にかかる重圧は並大抵のものではなかった。現時点でのネオ・ジオン確かに優位に戦闘を進めてはいるが、地球連

邦軍（エウーゴ、カラバを含む）が本気になれば、戦力の差が大きい故に勝てる道理は万に一つも無いのである。そんな状況で彼女に出来る事は、負ける瞬間を少しでも先に延ばす事位だけだった。

戦闘を継続することが、敗北に繋がるという事が判っていないながら、なぜ彼女がそこまでして前に進まなければならないかと言う理由はただ一つ……自分から去ったシヤアが再び表舞台に立つ日の為に、少しでも彼の前に道を造り、残しておきたい……シヤアの障害となるモノは今の内に出来るだけ取り除いておきたい……それだけであった。

そんな中、ハマーンは信頼出来る部下と共に、民間船に偽装した船でひっそりとサイド6にある某コロニーを訪れていた。一応観光客を装ってはいたが、ジオン系ではあるが連邦軍とも深い繋がりがある要人と会い、ネオ・ジオンへの協力もしくは援助を引き出したいというのが、本当の目的だった。

*

*

ハマーンの想い

サイド6内にあるホテルの一室……その時間で昼を過ぎた頃であろうか……。ハマーンの傍には、今回彼女の世話役として帯同を許されたナナイ・ミゲルの姿があった。

椅子に座りながら、ハマーンがこれからの事を考えていると、ナナイが不思議そうな顔をしながらハマーンに問いかけた。

「ハマーン様……」

「ん？どうした？」

「ハマーン様は今回の会談に、何故私を同行させたのですか？」

「何故って……嫌だったのか？」

「いいえ、むしろとっても感謝してますが……私よりも優秀な女性兵士は沢山いる筈ですし……その……」

「成る程……理由を聞きたいというのか？」

「はい……是非……」

ハマーンは一瞬やれやれという表情をしたかと思うと、ナナイの目を見ながら話し始めた。

「一つ聞くが、お前はシャアの事をどう思っている？」

「シャア・アズナブル様の事ですか？」

「そうだ」

「それは……その……」

頬を赤らめながら返答に困るナナイ。

「どうした？私に気兼ねせずに思っている事を答えてほしい」

「はい……ハマーン様と同じ位とっても憧れの存在です……すみません」

「謝る事ではない。むしろお前がシヤアの事をそう思ってくれて、私自身とても嬉しく思うよ」
ハマーンは嬉しそうに答えた。

「え？ハマーン様はシヤア様を……その……恨んではいらっしやらないのですか？」

「私が？シヤアを？……か？」

「はい……だってシヤア様はハマーン様を見捨てて逃げたお方ですもの……」

「ふふっ……。確かに恨んでいないと言えば嘘になるが……それと同じ位好き……いや愛していたりもするよ」

人には滅多に心を開かないハマーンが、珍しくナナイに本音を語り始めた。更に話を続けるハマーン。

「私とシヤアが深い関係だったのは……知ってるな？」

「は……はい……」

顔を赤くしながら頷くナナイ。

「私とシヤアは『ジオンの再興』という同じ夢を持って行動していると思っていた。いや、一時はシヤアもその事には同調していた筈さ……でも……」

一瞬話を止めた後、再び話し始めるハマーン。

「……でも、いつからか考えがズレ始めて……その溝を埋める事が出来なかったよ」

「でも、ハマーン様とシヤア様はとっても上手くいっていた様に見えましたが……？」

「表面上ではな……。だが、お前達が見てない所での言い争いも多かったんだよ」

「え……そんな……!!」

「シヤアも心の余裕が無かったし、私も父が死んで気負っていた面もあったかもしれない。冷静に考える余裕なんてお互い無かったよ……。互いに認め合い、必要としている存在なのに、なぜこうも激しく衝突してしまうんだろうって……。当時はずいぶん悩んだものだ。いや、今でも悩んでいると言った方がいいか……」

「……」

「私がこんな人間で……軽蔑したか？」

哀しそうな表情をしてうつむくハマーンを、ナナイはそっと抱き締めてこう言った。

「いいえ。例えどんな事があっても、私はハマーン様を一生お慕い申し上げます」

余りにも辛く、哀しい彼女の生き方に対して、ナナイは無意識に涙を流していた。

「私の為に泣いてくれるのか？」

「え？あ……私……泣いてますね……どうしたんだろう……涙が止まらない……」

「ありがとう。ナナイ。でも……あのまま私とシヤアが一緒にいたら……どうなっていたか判らなかつたよ。そうなるよりは、今の方が良かったともいえる。なぜなら、生きているならお互いやり直せる可能性がある訳だからな」

「お互いがお互いを認めているというのに……何故……」

「ああ……私も、何度かシヤアにもう一度やり直そうを言ってみたのだが……な」

ハマーンはアクシズが地球圏に戻って来てから、幾度と無くシヤアに遠回しではあるが戻って来てくれとアプローチを試みていた。

「そう言えば、シヤア様を救助された時なぜ無理矢理にでも引き留めなかったんですか？」

それはグリプス戦後に、負傷したシヤアを一時保護していた時の事を言っていた。（注…筆者の「背徳の恋華」参照）

その言葉にハマーンは一瞬躊躇った後、こう応えた。

「それは……当然思ったし期待もしたし、話し合いもしたよ……。でもあの時色々話をして……心を通わせ合った時、彼とはもう一緒に歩む事は不可能だとも悟ったのさ。実の所、アクシズがネオ・ジオンと名乗って地球圏で一定の力を得る為にはシヤアというカリスマが絶対に必要なのだ。だが彼が我々に協力出来ないという時点で本当なら手を引くのが正しい選択だともな。でも一旦動き出したものを止める事は出来ない……」

「……………」

無言で話を聞いているナナイの頭をそっと撫でながらハマーンはこう話を続けた。

「だからもう私は……シヤアが立ち上がり行動を起こした時に、出来るだけ障害が少なくなるように道を作っておけば……それで充分だと思うようになったよ」

「ハマーン様……」

ナナイの悲しそうな表情を見て、ハマーンは優しい口調でこう言った。

「……お前を徴用したのは、私の代わりにある任務を任せたいからなのだが……それはいずれ話す。だから……今は何も言わずに私に付いてきて欲しい……頼む……」

「はい……」

ナナイは一礼すると、数日後に迫った会談内容と資料を再度見直し始めた。

*

*

その夜、早めに床へ着いたハマーンだったが、これからの事を考えると、眠ることが出来なかった。戦争を継続する事は連邦軍に負ける事……つまり今の組織が崩壊し、彼女自身も命を落とすという事に繋がるのだ。

『何を怯えているのだ。我々には、連邦軍と互角に戦うだけの戦力など備わっていない事は、地球圏に来る前から判っていた事ではないか……。今更……。』

そうしていると、ベッドで寝ていたナナイが目を覚ました。

「……ハマーン様……眠れないのですか？」

「ああ、どうも寝付けなくてな……」

「確かに……ハマーン様でなくても、不安になります」

「それは仕方が無い事だが……我々がその様な態度を見せてしまつては、兵共が浮き足立ってしまう。不安に怯えるのはここだけの事だぞ」

「はい……」

ナナイがそう答えると、裸で寝ていたハマーンは、ベッドから起き上がると、下着を身に付けて髪を整え、好みの服を身に付けて薄く化粧をし始めた」

「ハマーン様……一体何を……」

「見ての通りだよ。これから少し外の風に当たってくるよ」

「外の風って……お一人で……ですか？」

「そうだ」

「ハマーン様お一人で行かれるなんて……私もご一緒にお供します！」

「心配は無用だ。それに私も一人で色々と考えたい気分なのでな」

「でも……」

「ここは中立のサイド内だ。注意するに越した事はないが、殺気を帯びている者が近寄ってくれば、すぐに判るから安心しろ」

「しかし……」

「お前は本当に心配性だな……。では出来るだけ連絡を入れる事にするよ。それで……いいだろう？」

「は……はい。判りました。ハマーン様がそこまで言われるのでしたら……」

「では行ってくるよ」

「お気をつけて……ハマーン様」

ハマーンは部屋の外へ出て、電気自動車が置いてあるホテルの地下に移動した。

『……さて……』

公務を離れて自由になった為か、少し安らいだ表情を浮かべていた。ハマーンは電気自動車を運転しながら、ホテルを出て繁華街から郊外へと向かった。

*

*

「まったく……僕はいつもついてないなあ……」

ハマーンが車で出かけてからしばらく経った頃、街灯が所々しか灯らない田舎道を、一人で歩く男の姿があった。一年戦争で連邦軍の英雄と称されたアムロ・レイである。

彼はネオ・ジオンがダカールを制圧した頃、ハヤトの命を受けてベルトーチカと共に宇宙に上がり、その後はカラバとエウーゴとの橋渡しの役目を行っていた。

そんな中、戦闘が小康状態になった事もあり、短い休暇を取る事が出来た訳だが、彼はそれを利用して单身父親がいるサイド6を訪れた。だが、既に父親が住んでいた建物は撤去されており、それどころかかなり前に亡くなっている事を役所で告げられた。そして、父親が埋葬されている共同墓地（コロニー内に数カ所あるのだが、そこには僅かの灰しか埋葬出来ない）に行き、数年振りの再会？を果たす事が出来た。

その後、帰り道にレンタルの電気自動車が故障し、業者と連絡が取れたものの回収の予定が立たないのでそのままそこに放置しておいてくれという事になり、ホテルまで歩いて帰る羽目になってしまった。

夕方五時頃に墓地を訪れて、現在九時を回っているが、彼が泊まっている宿までは、まだ一時間以上歩かなければならなかった。

以前、サイド6を訪れた際は、偶然にもシャアとラアに出会った訳であるが、今回はそんな感じの出会いすら無いまま、時々道端に座って物思いに耽りながら、延々と歩き続けていたのである。

幽閉された屋敷を出てからは、殆どアルコールを口にしなかったアムロではあるが、今日だけはパブで夜通し飲み明かしてしまおうかと思っていた……そんな時、アムロは向かい側から電気自動車が走ってくるのが見えた。

「車だ！頼めば乗せて貰えるかも」

アムロはそう言いながら、車に向かって大きく手を振った。やがて、車が彼を見付けて停まり、運転手である女性……ハマーンが優しく声を掛けた。

「こんな所でどうしたのですか？」

「実は車が壊れてしまっただけで歩いていたのですが、この先の街までで構いませんから乗せて頂けませんでしょうか？……」

そうは言ってみたものの、アムロは運転手が女性と判った時に、期待半分でお願いしていた。なぜなら、いくら治安が良いコロニーとは言え、夜に一人でうろついている不審な男を女性一人で運転している車に乗せる訳がないと思ったからである。しかし、アムロの考えとは裏腹に、ハマーンはニコツと笑っ

てこう答えた。

「私の車で良かったら……どうぞお乗り下さい。困っている人を助けるのは人として当然の事ですから……」

「本当にすみません。では遠慮無く……失礼します」

アムロが乗り込むと、ハマーンは再び車を走らせた。

*

*

「でも……本当に助かりました。実はもう歩くのを止めて、その辺で寝てしまおうかと思ってたんですよ」

アムロが恐縮そうな感じで言った。

「ふふっ、お気になさらないで下さい。私も一人で出歩いてて、丁度話し相手が欲しいと思ってましたから……」

車を運転しながら、とても優しい口調でハマーンが答えた。

「とは言え……貴方の様な素敵なお方の話し相手に相応しい人間かは判りませんよ。下心満載で声をかけたのかも知れませんし……」

その言葉に、ハマーンは素早く切り返した。

「もし貴方がそのような方でしたら、たぶん私は素通りしたと思いますわ。だって、そういう方は、そ

の様な雰囲気を全身に纏ってますから、すぐ判ってしまいますもの」

「へえ、じゃあ、僕は安全パイと判断したのですね。男として嬉しいんだか悲しいんだか……」

「なら、試してみますか？私は一筋縄ではいきませんよ。ふふっ」

「そんな事……車に乗せて頂いた恩を仇で返すような事は出来ませんよ。それに、もし口説くなら正々堂々と口説きますから」

アムロがハマーンの方を向きながら言った。その時、ハマーンと一瞬目が合った。優しい瞳の中にも、毅然とした表情をしている女性……髪型のせいもあるのだろうが、アムロはそんな彼女に無意識ながらセイラの面影を重ねていた。そうしていると、ハマーンが運転しながら話しかけてきた。

「そう言えば、泊まっているのはどの辺りなんですか？」

「この先の繁華街にあるアミールという安宿ですよ」

「ああ……それなら判ります。で、これからのご予定は？」

その言葉にアムロは上を指差した。頭上にはコロニーの反対側にある街が見える。

「明日は、この丁度上の方にあるギツツアという街で友達と会う約束をしています」

「お仕事ですか？それとも……」

「ええ、まあ……プライベートな……」

「あっ……会ったばかりだというのに、少し詮索し過ぎですよね」

「いえ、別に隠す様な事ではないですから。乗せて頂いた御恩もありますし、何でも聞いて下さい」

身分も、組織も、立場も気にしなくてもいい状況の中で、ハマーンは自分の心が少しずつ和んでいく

のを感じていた。

「ふふつ、でも、女性と話すのがとてもお上手なのですね」

「え？まあ……それだけ女性に振られてると言う事ですよ。でも僕の方から声をかけた事は殆ど無いんですけど……」

慌てるアムロを見ながら、ハマーンは楽しそうな表情を浮かべながら車を運転した。その後しばらく会話が無いまま時だけが優しく流れていった。やがて、ハマーンがポツリと呟いた。

「街までまだかかりますし、よろしければ暇つぶしに私の身の上話を……少し聞いて下さいませんか？」

「えっ？はい。僕で構わないでしたら……」

アムロの言葉に、ハマーンは静かに語り始めた。

「実は私……とっても愛していた人がいたんです。彼も私を最初はとっても愛してくれて、そんな幸せがずっと続くかと思っていたのですが……いつの間にか心がすれ違ってしまい……やがて別れてしまいました」

「……………」

「本当なら、それはもう過去の事と割り切って、また新しい恋をすればいいのですが、どうしても彼の事が忘れられなくて……」

「その彼とは……その後はどうなったのですか？」

アムロの問いに一瞬言葉が詰まるハマーンだったが、精一杯の笑顔を作りながら答えるのだった。

「この前久しぶりに会う事が出来たのですが……やはりお互い歩み寄る事は出来ませんでした。たぶん

もう……会う事も無いでしょう……」

「そうですか……僕が貴方に言えることは、時間が解決してくれるかもしれない……としか……」

アムロの精一杯の慰めにハマーンは優しく答えた。

「ふふっ。そう言ってくれるだけで嬉しいです。ホント……貴方の様な方が私の彼だったら良かったのに……」

「僕ですか？僕はそんな出来た男じゃありませんよ。いい加減で優柔不断で……」

そう言いつつ、夜景を眺めるアムロ。その姿にハマーンは忘れかけていた心の高鳴りを覚えた。その直後心はずっと溜めていた辛く、悲しい思いが吹き出してきて、感情を抑えきれなくなってきた。たまらずに、車を道端に停めるハマーン。

「どうしたのですか？」

「すみません。少し……苦しくて……」

必死に心を落ち着かせようとしたハマーンだったが、アムロの心配そうな表情を見た瞬間、ハマーンは思わずこんな言葉を口走っていた。

「あの……お願いがあるので……聞いてくれますか？」

「僕に出来る事でしたら……」

「こんな事……会ったばかりの貴方に頼む筋では無いと思うのですが、何も言わず私を抱き締めてくれませんか？」

「え？僕が……ですか？」

「はい……」

「でも何故……」

「……詳しくはお話出来ませんが……私は普段この様な感情を他人に見せる事が出来ない立場にいます。例えどんなに辛い事があっても、決してそれを表に出すことが許されないのです。でも、貴方とお話をしてしましたら、何故か心の押さえが利かなくなってしまう……。どうかこの場限りの事だと思って……」

ハマーンはそこまで言った時、アムロはそれ以上詮索する事はせずに、彼女をそっと抱き締めた。その直後、ハマーンは込み上げる思いを制御出来ず、アムロにしがみ付くと震えながら声を出して泣くのだった。その瞬間、彼の心にハマーンに苦しみ、悲しみ、憎しみの思念が伝わってきた。

「……！！」

アムロは一瞬驚きの表情を浮かべたが、やがていつもの優しい表情に戻ると、何も言わずにハマーンの頭を優しく撫でるのだった。穏やかな波長がハマーンの心の中に染み込んでいき、やがて二人は自然に唇を重ねていた。どの位そうしていただろうか。ハマーンの涙が収まった頃に、アムロがそっと話しかけた。

「そろそろ……いいでしょうか？これ以上貴方と心を通い合わせてしまうと……僕は貴方の心の中を覗いてしまうかもしれません。いい忘れてましたが、僕はそういう類の人間なんです」

その言葉に、ハマーンの眉が僅かに動いた。

「貴方は……私の心の中が判るといいますか？」

「はい……僕は世間で言う所の『ニュータイプ』と呼ばれる人間なんです。もちろん能力はある程度コントロール出来ますので、心の中を覗かないように務めました……隠していて本当にすみません」

それはハマーンにも言える事だった。

「それは……お気になさらないで下さい。実は私も……貴方と同じ類の人間ですから……」
その言葉にアムロは複雑な表情を浮かべて言った。

「貴方も……『ニュータイプ』だと言うのですか？」

一瞬躊躇ったのだが、首を静かに縦に振るハマーン。

「そうだったのですか……なら……貴方の苦しんでいる理由がほんの少しだけですが判ったような気がします」

「それは……どういう事ですか？」

「今の世の中では、ニュータイプはまだ『異端な者』でしか無い存在です。それに正しい道が判っているにも関わらず……人は同じ過ちを何度も繰り返してしまう生き物です。いくら僕が正しい事を言った所で、すぐに世の中が変わる程人は賢く無いんですよ……。そんな中で、こういう能力を持って生きるといのが、どんなに辛い事か……それは能力を持ってしまった者にしか判らない事でしょう」

アムロの言葉は半分正解だった。ハマーンは逆にアムロに対して質問してみた。

「貴方は……御自分がニュータイプだという事を嘆いていらっしやるのですか？」

「僕が？……ですか？確かに……そう思った事もありましたね」

アムロはそう言って一瞬視線をそらした後、少しためらいながらも、淡々と話を続けた。

「僕は……戦場でとても大切な人を殺してしまっただけです。彼女の最後の想いが僕の心に伝わってきて……今でも心に焼き付いて離れませんよ……。それに僕は僕の事をずっと思ってくれていた人すら幸せに出来なかった人間なのです。相手の心が判るといふ事は、時にはとても辛い思いをする事もありますよね……。だから戦争が終わってからしばらくの間はずっと悩んでましたよ。僕は生きてちやいけない人間なのだろうか？……ってね。割り切って生きてられる程……強く無いですから……。そしてお決まりの酒と女に逃げて……堕ちる所まで堕ちて……でもなんとか立ち直る事が出来て……今ここに居る事が出来るまでになりました」

「貴方は……兵隊さん……なのですか？」

ハマーンは探るような感じで聞いた。

「一年戦争の時には連邦の軍人としてモビルスーツに乗ってましたよ」

「今は？」

「今ですか？……もう退役してのんびり暮らしてます。このコロニーには父の墓参りで寄ったんです」

アムロの言葉にハマーンは少し違和感を感じていた。彼の持つ雰囲気は、退役した軍人のモノではなかったからだ。また、彼の中にシャアの雰囲気を感じたからこそ、彼女はあえてアムロを車に乗せたのだった。そうしていると、今度はアムロが逆に問いかけてきた。

「貴方はこのコロニーに住んでいる方なのですか？」

「私？……アク……いえ、ジオン……サイド3の人間です。今は別のサイドへ引っ越してますが、ここへは友達と観光で……」

とつさに話を作るハマーンだったが、お互いニュータイプ同士であるからどこまで嘘を見透かされているか判らなかつた。だがアムロは彼女に意外な言葉を言った。

「そうですか……。ジオンの人間でしたら貴方には連邦の軍人だった僕を恨む権利があります。もし貴方の隣人や家族が連邦の人に殺されていて、いつか復讐したいと思っっているなら、遠慮なく僕を殺して下さい。それで貴方の気が晴れるというなら……ね」

詭弁なのかもしれないが、出会ったばかりの人間……。それもジオン側の人間にそこまで言い切る男に、ハマーンは何とも言えない想いを抱いた。シャアとは性質が違うが、彼も同じようにハマーンの心を動かす魅力秘めている男だ。

「私は……。貴方の命を奪おうとは思いません。確かに貴方は敵側の兵士でしたが、今の貴方の言葉には尊敬の念すら覚えますわ」

「そう言ってくれると……。心が楽になります」

アムロのホッとした表情を見ながら、ハマーンはこんな事を訪ねてみた。

「失礼ですが、お付き合いしている女性の方は？」

ハマーン言葉に一瞬躊躇するアムロだったが、やがてポツリと話し始めた。

「その……。僕はまだ了承してないのですが、僕を慕ってくれる人が……。います。僕に興味を持って僕の為に色々とやってくれる……。見た目よりもしっかりした娘ですよ。僕はそんな彼女に僕の過去を全て話してあげたのですが、『それでも構わない。過去はもう終わった事よ。私が大切だと思うのは未来だから』って答えてくれました」

「そうなのですか……。ずいぶん積極的な女性なのですね。私もそれ位、好きな人に尽くす事が出来たら……幸せになれたのかも……」

「でも正直大変ですよ。『昨日なにやってたの?』『あの話してた女の人は誰?』とか毎日ですよ……」

「ふふっ……その気持ちは私も判りますわ」

「女性の方って、みんなそうなのでしょうか?」

「素敵な男の人だったら、独り占めしたくなるものですよ。ふふっ。そう言えば、その娘もニュータイプなのでですか?」

「幸か不幸かオールドタイプなので助かってます。……今日の事は墓場まで持つていきますよ」

「私の我が儘に付き合ったださったというのに……本当にすみません……」

「いえ、お互い様ですから。僕もお陰で哀しい日だったのですが貴方と出会えた事で、気持ちを切り替える事が出来ましたから……」

「それは……何よりです……」

その様な会話を楽しんでいる二人だったが、やがて車は繁華街に辿り着いた。その時ハマーンはアムロにこんな提案をした。

「あの……よろしければこの車、お借りしませんか? 私なら友達がもう一台借りてますので何も問題無いですし、手続きさえすれば大丈夫な筈です」

「それはとっても嬉しい事です……流石にそこまで甘える訳には……」

「貴方と色々話してみて、貴方に甘えて、私が貴方を気に入ったからなんですが……理由にならないで

しょうか？」

アムロは少し考えた後にこう答えた。

「判りました。そのご厚意……ありがたくお受けさせていただきます」

「では、失礼ですが貴方様の名前を聞かせてくれませんか？」

「あ……今まで名乗ってませんでしたね……」

そう言うと、一瞬の間を置いて言った。

「アムロ・レイです」

その瞬間、ハマーンの様子が驚きが変わった。シヤアからよく聞かされた連邦軍の英雄であるアムロ・レイ……それが彼だったのだ。自分がドズル、シヤア以外で好意を抱いた男性が、まさかシヤアと戦場で何度も戦った男だったとは……。

「アムロ・レイ……あの木馬……いえ、ホワイトベースに乗っていたアムロ・レイですか？」

「はい」

アムロはそう答えた後、ハマーンの様子を見ながら、話を続けた。

「……もし貴方が僕をアムロ・レイだと判った上で、かつジオンの人間として僕の事を激しく憎むようでしたら、遠慮なくこの場で降ろして下さい下さっても構いません。罵声も甘んじて受け止めますし、先程僕が言ったように……」

緊張した表情で話すアムロに対して、ハマーンは優しく答えた。

「……確かに貴方は連邦軍の兵士としてジオンと戦った事は事実ですが、私が貴方の立場でしたらやは

り同じように連邦軍の兵士として戦った事でしょう。それに連邦の上層部は憎むべき存在ですが、貴方を憎んだ所で世の中は変わりません。また、貴方は私を昔からの彼女のように、とても愛しく接してくれました。むしろ私の方が貴方にお礼を言いたい位です」

「そんな……僕は当たり前な事をしただけですし……」

「その当たり前の事が……貴方の魅力なんですよ。アムロ……レイさん」

「あ……アムロで構いません。それと、失礼ですが貴方のお名前は……」

「私の……名前ですか？」

「はい。こんなに立派な考えをお持ちである女性の名前を聞かずに別れたら、僕は一生後悔してしまいますよ。是非、教えて下さい」

「……私は……」

そう答えはしたが、まさか自分がネオ・ジオンのハマーンだとも名乗る訳にもいかず、とっさにこの名前を口にした。

「私の名前は……アルテイシア……普段は『アル』って呼ばれてます」

「ア……アルテイシアさんか……良い名前ですね。そう言えば僕の知ってる方も幼い時にその名前だったと言っていましたよ」

「それは、『セイラ・マス』様の事でしょうか？」

「あっ、彼女を知ってるのですか？」

「私もジオンの人間ですもの。ジオン・ダイクン様のご子息であるセイラ様を知らない訳にはいきませ

んわ」

「じゃ、僕と一緒に船で戦っていたのも知ってますか？」

「ええ、セイラ様は私と同じ名前ですし、私の愛した人がセイラ様を好きで、色々な事をよく語ってくれました」

「……そうなんですか……」

「実は私のこの髪型なのですが……、彼がセイラ様の髪型を余りにも褒めるもので、つい嫉妬してやってみたのですが、大層気に入ってくれて……複雑な心境です」

ハマーンは困惑した表情を浮かべながら言った。

「よっぽど貴方の愛した人はセイラさんが好きだった様ですね」

「ええ……本当に病的な位でした。そう言えば、セイラ様は今どうしてるのでしょうか？」

「残念ですが船を降りてからはもう会ってないんです……探そうにもその手がかりすら見付けられなくて……」

「そう……なのですか……」

寂しそうな表情を見せるハマーンに対して、アムロは話を逸らそうとした。

「あ……そう言えば車の事なのですが、貴方が泊まっている所まで私が一緒に行って、そこで僕が車を譲ってもらうというのはどうでしょうか？その方が貴方に迷惑がかからないと思いますし……」

その言葉に対して、ハマーンはこう答えた。

「なら、私の友達に来て貰もらって、そこで車をお渡しします。私が泊まっているホテルはかなり街外

れにありますし……」

「アルテイシアさんがそれでいいのでしたら、僕はそれでも構いません。お友達が来るまでの間、貴方とその辺の喫茶店でお茶でも飲んで話をすると言うのも悪くないですしね」

ハマーンは、にこやかに答えるアムロに対して、少し胸を高鳴らせながらこう言うのだった。

「ならば……その……あの……あと二〜三時間程……御一緒でも大丈夫ですか？」

「え？ええ……構いませんよ。その位でしたら喜んで……」

「本当に？」

「はい。これも縁でしょうからね」

「……縁……確かにそうかもしれませぬ。ふふっ」

嬉しそうに微笑むハマーンを、少し不思議そうな目で見ていたアムロだった。すると、ハマーンは繁華街にある駐車場に車を停めると、彼に対してこうお願いするのだった。

「あの……それでは……今から私の友達が来るまでの間、私と昔からの恋人同士の様に接して下さいませんか……？」

「こ……恋人の様に……ですか？」

「はい。……私に楽しい思い出を作らせて欲しいのです。それに、もし貴方が私の体を欲しいと言うのでしたら……私は……」

その言葉に驚き、困惑するアムロだった。

「え！？いや……その……愛している人が心の中にいる貴方に対して、そこまで求める事は出来ません

よ……安心して下さい。と言うのも何か変ですけど……ね。でも、貴方は本当に積極的な方なんですネ」
「やはり……男性の方はこんな性格の女性は嫌いなのでしょうか？」

悲しそうな表情をするハマーンに、アムロは彼女の目を見ながらこう答えるのだった。

「人それぞれだとは思いますが……僕はそういう性格は嫌いじゃないですよ。事実今付き合っている女性がそんな感じですし……。でも……本当に僕でいいのですか？」

「はい……貴方だからこそ……お願いしたいのです」

ハマーンの懇願する表情に、アムロは観念したように答えた。

「それで貴方が満足するものでしたら……僕に断る理由なんてありませんよ。では、しばらくの間はアルテイシア……いや、アルと呼ばせて頂きますね」

「……ありがとうございます……本当にありがとうございます……アムロ……好き」

そつとアムロに口づけをするハマーン。そんな彼女の髪をそつと撫でるアムロ。そして、ナナイに連絡をした後に車から降りて、繁華街を楽しそうに話ながら歩く二人は、どこから見ても恋人同士にしか見えなかった。

*

*

ハマーンは時間を潰す為の場所はないかと辺りを見回すと、近くに大規模なゲームセンターの施設がある事に気付いた。そして、その経営が『アナハイムエレクトロニクス』系列の会社だと判った瞬間、

ハマーンの心にある事が浮かびアムロに対してこう言った。

「ねえ……アムロ……」

「なんだい？アル」

「あそこで時間を潰そうと思うんだけど……いい……？」

ハマーンはゲームセンターを指差した。

「え？あれかい？」

「そう。あそこって『アナハイムエレクトロニクス』系列の会社が運営してるんだけど、そこにMSの操縦が出来るゲーム機があるって話なのね」

「MSを？操縦する？」

「そう。もちろんゲーム機だし、私もまだやった事無いんだけど、本物そっくりに動かせるという話なのよ」

「それって、開発費だけを見積もっても割が合わないだろう。軍事用か何かの転用なのかな？」

「そうみたい。元々は連邦軍が新米兵士を訓練する為のシミュレーターマシンとして作ったらしいんだけど、軍需不況だとか何とかで、それが民間レベルに流れてきた……と言うのは表の話で、実は意図的に流したらしいわ」

「意図的に？」

「そう。今、連邦は造反した軍人が多くてパイロット不足でしょ？だから軍に入る前から操作に慣れて欲しいというのが本当の理由らしいの。このコロニーには連邦系の人とかもよく来るから……。もつと

も、表向きはあくまでもゲーム機だから、ここのお役人も手が出せないみたいよ」

「ふくん……そういう時代だから……仕方ないという事か……」

意外な言葉にハマーンは少し驚いた。

「アムロって、そういうのは嫌い？」

その言葉に、アムロは少し寂しそうな表情をしながら言った。

「うくん。嫌いとかじゃないんだけど……僕は好きでMSに乗った訳じゃないからね。僕の友達の両親が目の前で殺されて、気付いた時にはガンダムで戦っていたという感じだったから……」

「え？……アムロって志願兵じゃ無かったの？確か以前見た貴方の伝記にこう書いてあったわよ『アムロ・レイは憎きジオンを倒す為に自ら志願して連邦軍に入隊した。それは彼の強い意志によるものだった』とね」

ハマーンの言葉にアムロは殻笑いをしながら、少し目を逸らして答えた。

「あれは……僕が書いた本じゃないんだ。以前連邦の広報が僕を取材に来て、僕が受け答えした内容を元に作った……プロパガンダ冊子さ」

「じゃ、内容は……？」

「史実と合ってるのは終戦の時に生き残っていたという所位かな？他はデタラメもいい所さ。それにあの本って戦意高揚を促すような文章ばかりが書いてあっただろう？」

「……うん。そう……だったわ」

「あれは僕を連邦の英雄……救世主に祭り上げたいと思った連中が、自分達に都合の良い様に書いた本

だよ」

「……」

「お陰で僕はジオン系の人にはかなり誤解されてる筈さ。だから僕は何度も公式に作り直してくれって頼んだんだけど……ね」

「アムロの言葉は事実だとハマーンは思った。なぜならアムロが執筆した（と思われていた）自伝を読んだ多くのジオン系の人間は、程度の差はあれ悲しみと憎しみを彼に対して抱いたからだ。その当事者からの意外な発言にハマーンはふと、こんな質問を試してみた。

「じゃあ、アムロは……ジオン・ダイクン様の考え方は……どう思ってるの？」

「え？うん……そうだ……ね……」

「あっ……ご……ご免なさい……つい……。そんな事連邦の軍人さんが軽々しく答えられる内容じゃ無いわよね……」

ハマーンの言葉に、アムロは上を向きながらこう呟いた。

「はは、僕はもう連邦の軍人じゃ無いから……アルが聞きたいなら幾らでも話してあげるよ」

アムロは一瞬の間を置いて再び話し始めた。

「僕はね、ジオン・ダイクンの考え方も、ザビ家の考え方も、昔の僕ならともかく今の僕なら評価出来る部分がそれなりにあると思えるんだ。あ、言って置くけど全部では無いからね。あくまでも部分的な考え方に限定されるんだけど……」

更にアムロは話を続けた。

「それと、僕はシャア・アズナブルがエウ・ゴの指導者としてダカールで演説した内容については概ね賛成なんだ。ただ彼はその理想を実現させる為の方法が判らないというか……その為に自分が汚れ役になる事を極端に嫌ってるというか……自分が犠牲になるという選択支を意図的に放棄している感じがする。彼位の地位、立場、能力があれば、もう精神的にも変わっていかねばならない時期な筈なのに……」

アムロの言葉に、ハマーンはコクリと頷いた。シャアがアムロと同じように物事を割り切って考える事が出来る性格だったら、彼女がこれ程まで苦しむ事は無かつただろう……。

「アムロ……貴方……ただの優しいだけの男じゃないのね……」

その言葉に、アムロは悲しそうな笑顔を浮かべながら応えた。

「そりゃ、優しさや綺麗事だけで世界を変えられるのなら、それに越した事は無いんだけど、現実には難しいだろう？」

ハマーンは軽く頷くと、こう答えた。

「貴方って、ジオン出身でも一切差別しないし、優しいだけじゃなくて自分の考えもしっかり持ってるし……」

「ははっ。僕がどんな考えを持っていても、シャアのようなカリスマがある訳じゃないからね。僕は僕の身の程を良くわきまえてるつもりだよ」

その言葉に、ハマーンは首を横に振った。

「そんな事無いわよ。やがて貴方の考えに賛同する人がきつと現れてくれる筈よ。私が保証するわ」

「ふふっ。嘘でもそう言ってくれと……悪い気はしないもんだね」

「本当の事よ。ああ……もつと早く貴方と会いたかったなあ……」

そう言うと、ハマーンはアムロの耳元でこう囁いた。

「彼女に内緒で……このまま私と付き合わない？ 私なら必ず貴方を幸せにしてあげられると思うわ」

もちろん現実的には全く無理な話なのだが、半分本気で言ってる事も、また事実だった。

「僕もアルを抱き締めた時、とつても繊細で優しい女性だという事はよく判ったよ。僕はそんな女性はとつても好きだよ。でも……僕は……僕には……」

アムロの表情を見て、ハマーンはハッと我に帰った。

「アムロ……それ以上言わなくてもいいわ……。私が好きなアムロ・レイは、一時の感情で付き合い合ってる恋人を簡単に捨てる人じゃ無ないし、そんな人に体と心を預けたと思いたくないわ……」

「……」

「ご免なさいね。わがままばかり言って……あつ、自分でも何言ってるのか判らなくなっちゃった」

「そんな事無いよ……アル。僕をそこまで評価してくれるなんて……嬉しいよ……ホント……」

「でも、私のように言い寄って来る女の人が多かったんでしょ？」

その言葉に、アムロは乾いた笑いを浮かべながら答えた。

「噂や興味で近づく人は多かったけどね。でもしばらくすると、みんな僕から離れて行ったよ……」

「寂しいわね……」

「うん……。だから……僕は僕の全てを判った上で接してくれたベルトーチカが好きに……」

アムロがそこまで言った時、ハマーンが彼の口にそつと手を当てた。

「お願い……今はその人の事は……忘れて。私の事だけ考えて……私だけを……見て……」

「うん。判った。好きだよ……アル……」

人目もはばからずに、濃厚なキスをする二人。そんな行為をしながら、ハマーンはこう感じていた。『なんで……もっと早く貴方に会う事が出来なかったんだろう……。この人なら私の理想を実現してくれる為の、真の理解者になってくれたかもしれないのに……』

ハマーンは、敵味方であっても、自分の意志を強く持つてる人がとても好きだった。『私に従わない者は排除する』と言う言葉は、裏返せば『生半可な考えのヤツは反抗するな』という事の裏返しなのだ。ふとアムロを見上げるハマーン。そこには、優しい目で彼女を見つめているアムロの姿があった。彼女の心臓の鼓動が更に激しくなる。

『私がこんなにも心を許すなんて……いつ以来だろう……。ああ……アムロの事がとっても好き』

このままじつと見つめていると、本当に自制心が効かなくなると思ったハマーンは、アムロの手を掴むと、急いでゲームセンターの中へと入っていった。扉を開けると、フロアはかなり広く、最新型から旧式のゲームまでありとあらゆる機械が設置されていた。

そんな中で、かなりのフロア面積を専有しているのが、MSシミュレーターマシン「MSF」であり、連邦、ジオン型のコックピット（注…全方位型では無く、旧式の限定型）が各五台ずつ設置されていた。

プレイヤーは開始前にフリーモードで参戦するか（その場合、他のゲームセンターに設置されている機械で参戦している機体や、コンピュータが操作する機体が入り交じったの乱戦となる）、コンピュータと戦うミッションモードで参戦するか、あらかじめ決めた仲間だけで行う対戦モードの三種類が選択出来た。勝敗はフリーモードとミッションモードが自機が破壊されるまで、対戦モードは原則三回戦でどちらかが二回勝つまでとなっていた。

また操作に関しても、実機と全く同じ操作が出来るマニュアル形式から、ある程度コンピュータが補助してくれるオートマチック形式の二種類が用意されていた。更に戦闘は本人の了承があれば観客にも設置されている巨大モニターで公開出来るのだが、軍人が休暇中のお遊びで行っている事も多く、実践さながらの光景が見られる事もしばしば見られた。

アムロとハマーンは、待合い場所に置いてあるゲームの説明書を読みながら、自分達の番が来るのを待っていた。その間、説明書を真剣に読みふけるアムロに対してハマーンが言った。

「どう？元パイロットから見てこのゲームは？」

「どうって……これ……軍に置いてあるシミュレーターマシンそのものだよ。もともと、全方位モニターじゃ無いから旧式のシステムなんだろうけど……」

「アムロはどっちのシステムが好きなの？」

「僕はこっちの方がいいかな……乗り慣れてるからね」

話を返しながらも、アムロの目は説明書に釘付けだった。そんなアムロを見つめながら、ハマーンはそつと口を開いた。

「アムロ……私の最後のお願い……聞いてくれる？」

「なんだい？アル……」

「私と……このゲームで対戦して欲しい……」

急な話に、アムロは半分驚きながら答えた。

「え？僕と？まあ……それは構わないけど、僕の戦闘を見たいだけならモニター越しの方が……」

その言葉に、ハマーンは一瞬躊躇したが、意を決して話し始めた。

「……私……一年戦争時はジオンのパイロット候補生だったの……それでもダメかしら？」

「え？」

アムロの表情が、驚きが変わった。

「じゃあ……ララアと会った事もあるのかい？」

「ララア？ああ、ララア・スン様の事ね。あの方とはニュータイプの研究所で何回か会った事があるわ。」

話した事もあるけど……どんな内容だったかは忘れちゃった」

現在の立場や自分の本名を話の中でを上手くぼかしながらも、淡々と自分の過去を話し始めるハマーン。

「……で私はニュータイプの訓練がメインだったから、MS自体の操作はそんなに上手くないと思うけど、アムロとお手合わせが出来るんだったら、やっぱり戦ってみたいと思うの……。ジオンの人間とし

て連邦の英雄さんの腕前がどれ程のものなのかずっと気になってたから……。それにゲームなら負けても……。死ぬ事は無いし……」

その瞬間、アムロの目が一瞬変わった事をハマーンは見逃さなかった。アムロがハマーンの間を見ながら、とても寂しそうな表情で言った。

「そうだね……」

「アムロ……ララア様の話……もつと聞きたい？」

「いや……もう充分さ。最近やっと吹っ切れてきた所だし……ね」

「それはもう忘れたいという事かしら？」

「ううん。ララアとの出会いはとっても大切な事だったけど、生きてる内は僕に出来る事をやらなきゃならないって事だよ。ララアとはいっても遊べるけど、今の僕だから出来る事ってのもあるからね……。例えば君の心を癒すとか……」

「!!!」

アムロの言葉に、ハマーンは胸の鼓動が再び高鳴るのを覚えた。これ以上アムロといれば、自分もつと彼の事を好きになり、誰にも渡したくなくなるばかりか、これから訪れるであろう自分の運命にも巻き込んでしまう事にもなるのだ。

「アムロ……たぶんアムロが私を気に入ってくれるのは、私の心の中にララア様の面影と、セイラ様の面影を見てるからだと思うわ……」

ハマーンはその言葉の後に心の中で『シヤアと同じように……』と続けた。シヤアならここで否定す

る所なのだが、アムロの反応は少し違った。

「アル……男って生き物は確かに印象に残った女性の面影をずっと引きずってしまう傾向があるみたいなんだ。確かに君にそれを全く感じなかったかと言えば……ゴメン……。本当は嘘でも『そんな事無いよ』って貫き通せればいいんだろうけど、僕は嘘が付けられない性格だから……」

その言葉を聞いて、ハマーンの表情が少し和んだ。

「私の場合、信じていた人に裏切られたから、貴方の様にはつきり言ってくれる人が好きよ……」

「ふふっ。ありがとう。あつ、でも君がとっても魅力的な女性だって事は嘘じゃないよ。もし許されるのなら君と一緒に同じ時を過ごしたいって思ってるし……」

「今日会ったばかりなの？」

「これでも人を見る目は有るつもりだよ。アル」

優しくハマーンを見つめるアムロ。そんな時ゲームが終了して数人がプレイ可能とのアナウンスが会場内に流れた。今なら連邦、ジオンの機体どちらでもプレイ可能らしい。

「プレイ出来るって。やりましょ」

「余り気が乗らないけど……君が望むのなら……」

「じゃあ、もしアムロが勝ったら、私の事もつと教えてあげるわ」

「ふふ、楽しみにしとくよ」

そう言いながら、二人はゲーム機の前まで行き、簡単な手続きを行った。ルールは二人だけの対戦プレイで、観客へのモニター中継は無く、地上戦が一回のみという設定にした。その他細かい条件は、選

択した機体によって自動的に調整されるらしい。

「アムロはどの機体で戦うの？ やっぱり連邦系？ 何ならジオン系のMSに乗ってみる？ 噂よりもずっと扱いやすいのよ」

ハマーンが自信ありげに言った。

「そうだな。でもやっぱり乗り慣れた『あの機体』を使わせてもらおうよ」

「じゃあ、私はジオン系の機体で戦うわね。あ、それと戦闘中に選択した軍内で使用しているMSにチェンジ可能だから、もし性能的にダメだと思ったら……」

ハマーンの言葉に、アムロはこう答えた。

「MSの性能差が戦力の絶対差では無いよ。アル」

「ふふっ、その言葉、覚えておくわ……」

ハマーンはそう答えると、ヘルメットを装着してジオン系MSのコックピット内へ入っていった。その時アムロの目は、一年戦争時によく目にした兵士の乾いた目になっていたのだが、当然の事ながらハマーンが気付く筈は無かった。

こうして、歴史に残らない戦闘の幕があいた。

*

*

「この感触……久しぶりだな……」

全方位モニターとは違い、限定されたモニターに表示される映像を眺めながら、アムロは久しく忘れていた感覚を思い出していた。

選択したMSはRX78タイプ。彼が使用していたガンダムタイプだが、地上戦という事で、あえてマグネットコーティングは無しという設定にした。武器もビームサーベルとバルカンは使用可能なものの、ビームライフルの残弾が満載から、残弾二発に減っていた。これは、相手（ハマーン）が選択した機体との調整の為という表示がモニターに表示された。

「成る程、そういう事か……さて、アルは一体何の機体で出てくるんだろう」

相手の機体の種類は、モニターに表示させる事が可能なのだが、アムロはあえてそれをしようとは思わなかった。そんな事をあれこれ考えていると、通信回線から、その昔よく聞いた声が響いてきた。

「アムロ。準備は良くて!？」

ハッと耳を疑い、オペレーターが表示されているモニターを見ると、画面ではセイラ（注：厳密には再現されたCG）が当時と同じ姿、同じ声で今回の作戦を説明していた。どうやら『アムロ』という名前は、ガンダムを選択すると自動的に選ばれる名前らしい。アムロはそれを懐かしそうな気持ちで眺めていた。すると、セイラが当時と同じきつ目の口調で言い放った。

「これで終わりだけ……聞いてるの？アムロ？」

アムロが驚いて黙っていると、画面に『何かメッセージを発して下さい』という文字が現れた。戦闘を真似てはいるが、これはあくまでもゲームなのだ。アムロは少し笑みを浮かべながら、こう答えた。

「大丈夫ですよセイラさん」

すると、画面のセイラが笑顔を浮かべながら言った。

「そう。アムロなら出来るわ。頑張っつね……」

その言葉を聞いたアムロは、当時に戻ったかのような感じで、レバーを握りしめてこう叫び出した。

「ガンダム。出る！」

ホワイトベースのカタパルト（の画面）から、当時と同じように再現されたガンダムが勢い良く飛び出した。最初の舞台は中東の砂漠地帯……。あの、ランバ・ラルとの戦闘場所である。

*

*

「どこだ……彼女はどこにいる……」

地上に降り立ったアムロは、モニターで常時監視しながらも、センサーが鳴るのをじっと待った。相手が待ち伏せしている可能性がある以上、下手に動く事は自殺行為に等しいからだ。その間、彼は舞台の地図を画面上に映し出して、場所の把握に務めていた。場所はランバ・ラルのグフと戦った中東の砂漠地帯なのだが、演出上実際には無かった遺跡が点在しており、岩場のような身を隠せる場所もあちこちに点在していた。

「まあ……そのまま再現してもゲーム的には面白く無いだろうし……仕方が無いって所か……」

思わず苦笑するアムロ。と、その時、右側の警報機がけたたましく鳴った。

「来た！」

アムロが振り向くとマシンガンの弾がガンダムの装甲に当たり跳ね返った。慌てて照準を合わせると既にMSの姿は無かったが、彼は立ち去る青いMSの姿をはつきりと目撃した。

「あの形……ザク……いや、グフか……！」

ビームライフルを構えながら、先程反応した場所からは見えない位置に移動して、再びじっと待つアムロ。

『相手がグフならこっちはロングレンジで待つてればいい。僕と戦いたいと言ってきた以上、必ず彼女の方から出てくる筈。僕はその時を狙って叩けばいいだけだ』

数々の修羅場をくぐり抜けてきたアムロは、ゲームとは言えあくまでも冷静に、そして確実に対処していた。これは所詮ゲームであり、少々の被弾は覚悟した上で大味な戦闘戦を行う事も可能だったし、実際にはそうやって戦闘をする者の方が多かった。だが、それでは真剣に戦いを望んだ彼女に対して失礼であるとアムロは思っていた。ハマーンもそう考えていたらしく、迂闊な攻めは全くと言って良い程してこなかった。

その頃グフのcockピットでは、ハマーンが正面モニターに可能な限りの戦闘パターンを表示させて成功の可能性を模索していた。しかし、その結果はいずれも「敵のビームライフルを回避してから」という前提条件を示していた。

『やはり格闘戦に持ち込まないとガンダムには歯が立たないという事か……。もともと、そんな事は承知でこの機体を選んだのだから仕方が無い事だが……』

そう呟く彼女の心に、ある日の光景が浮かび上がった。

一年戦争時のある時、ハマーンは姉と共にドズルが指揮する司令部を慰問した事があった。その時、ドズルは忙しい中でも時間を見付けては話し相手になったり、内部を案内したり、目をかけている部下を紹介してくれたりしていたのだが、通信兵が走り寄り、ドズルに何か二言三言告げると、それまで穏やかだった表情が一変した。

「それは……事実なのか？」

「はい……何度も確認を取りましたが……残念ながら……事実です」

「そうか……判った」

一札をして足早に持ち場へ戻る通信兵を見ながら、天井を向きながら何か考えていたドズルだったが、やがてハマーン達の方を振り向くと、精一杯優しい表情を作りながらも穏やかな口調で言った。

「すまんが急に用事が出来ちまってな……。わしはこれから部屋に戻らなければならんだよ。後の事は部下に頼んでおくから、ゆっくりして行ってくれ……。本当にすまん」

若いハマーンにはその言葉の意味が判らなかったが、彼女の姉……マレーネは全てを察したかのように、こう応えた。

「判りました。さつ、司令部に戻りましょう。ハマーン」

「はい。お姉様……」

ハマーンは不思議そうな顔でドズルを見上げると、彼は何も言わずに優しく頭を撫でてくれた。その

時、ハマーンの心に悲しみの波長が流れ込んできた事を、彼女は今でもはっきりと覚えていた。

後に、ハマーンはその時ドズルと通信兵の会話が、ランバ・ラルの戦死の報告だった事を病床の姉から聞いた。また、姉はその後ドズルの様子を伺いに行ったのだが、部屋でグラスを傾けながら、ランバ・ラルの為に背中を震わせながら男泣きをしている姿を見て、彼を更に好きになったという事も、まるで昨日の事かのように嬉しそうに話すのだった。そしてランバ・ラルと戦った相手が、連邦の木馬であり、ガンダムであり、そしてガンダムのパイロットが連邦の英雄であるアムロ・レイだったという事も……。

接近戦に持ち込みたいグフと、それを許さないガンダムの攻防戦は、岩や遺跡を挟んで散発的ながらも繰り広げられた。ハマーンとしてはガンダムのビームライフルの弾切れを狙っており、岩を投げたりして陽動を行ってみるのだが、それに吊られて無駄な射撃を行うアムロでは無かった。状況を素早く判断して直ぐに物陰に隠れて次の攻撃に備えるという行動は、数々の戦いを経験してきたパイロットなら当然の行動だった。

ガンダムにこのような行動をされている限り、グフには辛い状況が続いていた。実戦ならば仲間がいて援護射撃をしてくれるのだろうか、残念ながらそれは一対一の決闘である限り、無理な話だった。だが、これは不利を承知で挑んだ戦いなのだ。今更愚痴を言う位なら最初から戦わなければ良いだけの話なの

だ。『生き残る為には最大の努力をするしかない』これは一年戦争時にハマーンが無名のパイロットから聞いた言葉である。

このゲームは、機体が三分以上停止しているとディスプレイに『戦って下さい』と警告が流れるのだが、先程からその表示が『これ以上戦闘を継続しない場合は戦闘継続不可能と判断してゲームを中止します』という文字に変わった。アムロがそれに苦笑していると、対戦通話機能を示すランプが点滅した。(注…これは当然実機には付属していない機能)アムロが回戦を開くとハマーンの声が響いた。

「アムロ、中止になるのも困るから、一気に決めるわよ」

「それは構わないけど、グフは接近戦にならないとかなり辛いぞ。とは言え、僕は君の射程内に入るつもりは無いよ」

「それでこそ戦い甲斐があるわ。じゃ……」

そう言うと、回戦を閉じるハマーン。その直後、アムロのコックピット内に再び警報が鳴り響いた。慌てて各モニターを見回したが、それらしい物体は全く見当たらなかった。やがて目標を察知したコンピュータが、敵の位置を割り出した。ガンダムの真上数十メートル。

「真上か！」

アムロはビームライフルを敵がいると思われる方向へ素早く向けた。すると、太陽の位置と重なり、眩しくて目標が特定出来なかった。

「くそっ！！」

アムロは咄嗟にバルカン砲の引き金を引いた。すると、空中でグフが撃ったマシンガンの弾と当たり、激しく飛散した。その場に立ち止まるのを危険と思ったアムロが機体を移動させてライフルを構えようとしたその瞬間、減速無しで突っ込んで来たグフが、ヒートサーベルをガンダムめがけて突き刺そうとしてきた。

「ああああっ！！！」

盾で防御しようとしたアムロだったが、一瞬の判断の後に盾をグフに投げ付け、直後にバーニアを一気に吹かして体当たり行動に出た。意表を突かれた行動に驚きの表情を浮かべるハマーン。

「なっ！何だと！」

慌てて左手のマシンガンを撃ちながら、間合いを取ろうと後方へ退こうとした。だがその瞬間ガンダムのビームライフルがグフの左肩付近を貫いた。一瞬の隙をアムロは逃さない。

「くっ！」

グフのコックピット内部で警報がけたたましく鳴り響いた。『左肩動力部破壊！爆発の可能性は低いが重大な事故に繋がる可能性有り！』モニターに赤い文字で警告が表示された。

「なんの！まだ！まだ戦える！」

地面に着地して体勢を整えると、バーニアを吹かしてヒートサーベルを突き刺そうと突撃するハマーン。アムロはビームライフルの照準を合わせてグフを撃とうとしたが、その時足場が悪く、ガンダムは一瞬バランスを崩してしまった。運命の女神は一瞬ハマーンに微笑んだ。

「！！！」

必死に体勢を立て直し回避行動を取ろうとしたアムロだったが、間に合わないと悟るや否や、ビームライフルを持った手を自らヒートサーベルに向けて突き出した。ヒートサーベルがガンダムの右手の甲の部分から一気に肘の部分まで突き刺さっていく。腕の回線がショートして激しく火花を散らす。アムロの絶叫が響き渡った。

「まだまだっ!!!」

ビームライフルのエネルギーによって右手が誘爆するガンダム。それを見てハマーンの気が一瞬緩んだとしても仕方が無い事だろう。その時、アムロはガンダムの右腕を肩から強制的に外して体勢を左側に傾けると、左手でビームサーベルを抜きグフのコックピットに真横から突き刺した。

「なっ！何！！」

ハマーンは一瞬何が起きたのか理解出来なかった。手傷を負わせたと思った瞬間にガンダムが視界から斜めに消えた……その直後、勝負は一瞬にして決まったのである。

「ふう。間一髪だったな……」

アムロはバーニアを吹かして安全圏まで逃げると、背を向けて爆風から守る態勢を取りながら安堵の表情を浮かべた。その直後、グフが大爆発を起こしてこの戦いは幕を下ろした。戦場では一瞬の気の緩みが命取りになるという事と、どんな状況に陥っても出来る事は全て行うという思考の柔軟性が勝敗を決めたと言えた。

ハマーンは確かに能力的には優れたモノがあるのだが、実戦経験、それも地上での接近戦は初めてと

言つてよかった。ファンネルを使う戦闘になればまた違う結果になったのだろうが、アナハイム社のゲム機でそれを求めるのは酷というものだった。やがて通話機能のランプが灯ったので再び回戦を開くと、ハマーンの残念そうな声が聞こえた。

「……やっぱり実戦を経験してる人は違うのね……。私、ガンダムの右手を破壊した時一瞬気を抜いてしまつて……まさか肩のジョイントを外して回り込むとは思わなかつたわ」

「MSは生身の肉体と違うからね。人が想像する事以上の動きをすれば、今回のように絶体絶命の時でも何とか対処出来る事もあるんだ。人間は慣れてないとそう言う時は思考が一瞬混乱するから……」

「ええ、一瞬何が起きたのか……」

「こればかりは経験を積むしかないし、その為のシミュレーションだから……」

「ええ、とつても勉強になったわ。ありがとう。アムロ……」

「ふふっ、どういたしまして」

アムロはそう言うと同線を閉じた。

*

*

「ふう……やっぱりまだ感が戻ってないな……どうしても計器に頼ってしまう時がある……」

アムロがゲームセンター内にある休憩用イスの上で缶コーヒを飲みながら独り言を言っていると、トイレから戻ってきたハマーンが疲れたような足取りで側に座った。優しく声をかけるアムロ。

「大丈夫かい？アル？」

「ええ……何とか……」

ハマーンは軽く笑みを返して反応すると、力無くアムロにもたれ掛かった。余程精神的に疲れたらしい。

「満足したかい？」

「え？そつ……そうね。でも……」

「でも？」

「本音を言うと戦わなければ良かった……と思ったわ。まさか貴方があんなに強いとは思わなかったもの……」

「それは経験の差が出たんだと思うよ」

「私の腕が未熟だって事かしら？」

「いや、君の腕は僕から見てもかなりのものだと思うし、実戦を積みめばすぐ僕なんか追い越すと思うよ。もつとも、戦場で君の姿は見たくないんだけど……ね」

今の言葉は、アムロなりの優しさの現れだった。慌てて話を合わせるハマーン。

「そつ、そうね。ジ…ジオン軍から開放されて良かったって事かしら？」

「そういう事。君にはこういう普通の生活が似合ってるよ。アル」

「うん。ありがと……。アムロ」

アムロの屈託の無い笑顔に、ハマーンの心は先程からずっと痛みっぱなしだった。シヤア達とは違い、

自分の心を素直にさらけ出してた上で、優しく気遣ってくれる……。それに対して自分は身分を隠しているばかりか、本名すら明かしていない……。アムロをシヤアと同じ位好きになってしまったが故の悩みだった。そうしてしばらくの間戦闘の余韻で疲れた体を癒していると、ハマーンがポツリと言った。

「アムロ……答え辛い事を聞くけど……今でもMSに乗ってるんでしょ？」

「ん？どうしてそう思うんだい？」

「あの動きは何年もMSに乗ってない人が出来る事じゃないわ。それに、貴方の目には時々優しさの影に飢えた野獣の目が見えたから……」

「そりゃ気のせい……って言いたい所だけど、君の前で嘘は付けそうも無いな。詳しくは言えないけど確かに乗ってる事は乗ってるよ」

「そうなんだ……やっぱり戦場に出てるんだ……アムロ……」

「でも本音を言えば、僕はもう戦いたくは無いいんだけどね。人の最期の思念が頭の中に入ってくるのは、余り良いものじゃ無いから……」

「……そうね……」

ハマーンは『その気持ち……よく判る』という言葉を読み込んだ。そうしていると、今度はアムロがハマーンに向かってこう言うのだった。

「アルこそ……操縦が久しぶりって訳では無いよね……」

「……うん……」

沈黙の時間が辺りを支配した。その間、ハマーンは本当の自分の事を話そうかどうかずっと考えてい

たのだが、やがて意を決してこう言った。

「アムロ、私、貴方まだ言っていない事があるの。私、アルテイシアって名前じゃなくて本当は……!!」
『ネオ・ジオンの指導者ハマーン・カーンなのよ!』と彼女が言おうとしたその瞬間、アムロは濃厚なキスをして会話を遮った。周りの何人もの人ががその光景に気付いてニヤニヤと見ているが、そんな事はお構いなしにキスをするアムロとハマーン。やがて、ハマーンが冷静さを取り戻したと思った頃、アムロは唇を離してこう囁いた。

「ここは戦場じゃないんだ。話したくない事を無理に話す必要は無いんだよ……アル」

「アムロ……」

「ニュータイプの僕が言うのも変だけど、世の中、知らなければ幸せな事だって沢山あるさ。そりゃ僕も君の事を全て知りたいよ。……でも、それ以上に今の君との関係を壊したく無いんだ。どうか僕の努力無駄にしないで欲しい……僕だけのアル……アルテイシアでいて欲しいから……ね」

アムロはハマーンをそっと抱き締めた。ハマーンは心臓がドキドキするのを感じながら、こう話しかけた。

「アムロ……私……本気で貴方に惚れてしまっそう……」

「……アル……素直なんだね……君は……」

「……好きよ……」

「僕もだよ……アル……」

人目も気にせずキスをする二人。その後、二人はゲームセンターを後にすると、レストランや展望台

で遊び、束の間の平和な気分を満喫するのだった。

*

*

どの位経った頃だろうか、指定した待ち合わせ場所に車が一台留まり、ナナイが表向きは冷静な表情をしながら降りてきた。(ナナイにはハマーンが偽名でアルテイシアと名乗っている事を、トイレに言った際に告げている)

「アル！お待たせ！」

「遅かったじゃないの！」

「ゴメーン！道判んなくてさっ！迷っちゃった！」

事前に打ち合わせていた様に、観光客を装う二人だった。

「はい、言われた物持ってきたわよ！」

紙袋をハマーンに手渡すナナイ。

「ありがとう！」

そう言うとハマーンはアムロの方を向いてとても幸せな表情をしながらこう言うのだった。

「今日は色々ありがとうだね。これ……お礼にもならない物だけど……その内役に立つと思うわ」「なんだろう？」

アムロが開けてみると、中には一枚のディスクが入っていた。

「ディスク？」

アムロが不思議そうに呟くと、ハマーンが耳元でそつと言った。

「私の恥ずかしい画像が沢山入ってるわ。楽しんでね」

その言葉に驚くアムロだったが、ハマーンは笑いながらこう言うのだった。

「ふふっ……冗談よ。冗談……でも大切なモノには間違いないわ。連邦側のモビルスーツに足りないモノがね……」

その言葉にアムロは眉をピクリと反応させた。

「今……何て……？」

その言葉を見無視しながらハマーンはこう言うのだった。

「じゃ、お元気で……貴方と会えて本当に良かった……。好きよ」

軽くキスを交わし、去り際に手を振りながらこちらを振り向くハマーンは、先程までアムロの前で見せていた優しい顔ではなく、鋭い眼光と険しい表情に変わっていた。アムロはその変化に一瞬ドキッとしたが、それが普段の彼女なのだろうと思った。

『今日の事……ベルトーチカには絶対に言えないな……』

そう言いながら、ハマーンから借り受けた車を運転して自分のホテルへと向かった。

一方ハマーンとナナイはアムロのホテルのとは反対の方向に車を走らせて、しばらくした所で角を曲がって停車すると、ナナイが慌てた口調で話しかけた。

「ハマーン様！見ず知らずの男性と一緒にだなんて……本当に心配してたんですよ！」

「すまなかったな。でも、彼はお前もよく知ってる男だぞ」

「私ですか？」

「そうだ。……アムロ・レイだよ。一年戦争でガンダムに乗っていた連邦の英雄だ」

「ええ！あの人が！ですか！！？」

ナナイは目を丸くしながら驚いた。

「……シヤア程ではないが強くて良い男だったぞ……」

「その……ハマーン様の御身分は……明かさなかったのですか？」

「明かそうとしたのだが……私との思い出を大切にしたいそうさ。まったく……嬉しい事をいつてくれる……」

一瞬、恋する少女の表情に戻ったハマーンだったが、再びいつもの表情に戻ると、ナナイに言い放った。

「さあ、遊びはここまでだ。戻るぞ、ナナイ」

「は……はい！」

ナナイはそう答えると、車を発車させて自分たちが宿泊しているホテルへと向かった。

エピローグ

後日行われた交渉は、結果から言えば失敗であり、これでネオ・ジオンは事実上生き残る最後の切り

札を失った。相手側からすれば、シヤアというカリスマの駒が無い組織では民衆の指示が得られないので有形無形の支援は出来ないという事であった。自分達にとってメリットが無い事には投資しないという事なのだろう。

だが、スペースノイドの要人とのパイプが出来た事は、後の事……シヤアが立ち上がる時の事を考えればプラスに作用するかもしれないとハマーンは思った。

ハマーンはナナイに短い期間ではあるが軍事学、帝王学の教育を可能な限り行い、シヤア好みの女性に仕立て上げた。元々ナナイはハマーンとかなり似ている部分が多い上に、頭が良く飲み込みが早かったのでさほど苦にはならなかったらしい。ハマーンとシヤアが決裂した最大の原因は、ハマーンが自ら動くことになってしまったからなので、ナナイにはどんな事があってもシヤアを前面に立たせて彼が表の顔、裏の顔（性生活）で暴走しないように徹底的に心でコントロールする事を教え込んだ。

また、アクシズでシヤアが去ってから開発した技術、隠し資産の口座等、ネオ・ジオンの重要な軍事機密を残らずナナイに託し、ジュードーとの最終決戦の前に彼女の軍籍を全て抹消してしばらくの間身を隠すように命令した。

（以下その時のハマーンとナナイの会話から）

「いずれシヤアが立ち上がる時期が来たら……頼むぞ」

「はい。……でも、その時……シヤア様は私を気に入って下さるでしょうか？」

「それは大丈夫だ。ヤツの好きな所は全てお前に教えた。私から『我』を取って、都合の良い時に母親代わりにしてくれるような女性がヤツは好きなのだよ……」

「自分勝手……なんですね……シヤア様は……」

「まあ……実の妹が好きな男だからな。相当の変わり者だというのは覚悟しておけ」

「でも……そんな人をハマーン様は愛してらっしゃるんですよね？」

「当たり前だ！だからこそお前に私の代わりを頼むのだ。そこを忘れるな」

「はっ」

この後、ナナイはネオ・ジオンを去り、ハマーンが言った事を忠実に実行していった。

アムロはその後サイド6で仲間との情報交換をした後、そのままそこで情報収集作業を継続していた時に戦争が終了した事を知った。元々戦力差があった上に、ネオ・ジオン内で分裂騒ぎがあつて同士討ちしたとあつては、アムロが戦場に出る必要は無かつたのだ。

その後、戦後の混乱で仕事に忙殺された為、ハマーンからの封筒の事をすっかり忘れていたが、ある日ホテルの自室で何気なくTVにネオ・ジオンがダカールを制圧した時に披露したパレードやパーティーの映像が流れた。画面に映ったネオ・ジオンの実質的指導者の顔を見た瞬間、彼の表情が一変し、持っていたコーヒーを落としそうになった。

なぜなら、画面の中で凜々しく手を振っている女性が、あの日出会った女性と同一人物だったからだ。アムロはネオ・ジオンとの抗争に直接関わっていないが、彼女の顔を今まで知らなかったとは言え、そんな身分の女性があの日自分に抱き付き、肩を振るわせて泣いていたとは……とても信じられなかったからだ。

(以下その時のアムロの独り言)

「間違いない……あの時の彼女だ……」

一瞬言葉に詰まった後、更にこう言った。

「僕はハマーン・カーンとデートしてたというのか……ははは……」

アムロはハマーンとの行動を頭の中で回想した。ネオ・ジオンの指導者として気丈に振る舞ってはいたが、その裏で女が必死に悩み、苦しみ、壊れそうになる心を無理矢理押さえ込んでいた……想像を絶するプレッシャーに押し潰されぬ様に、自分を徹底的に律して冷酷に振る舞わなければならない程、彼女は孤独だった。

「……どう見ても普通の女性だったよなあ……抱き締めると壊れそうで……ララアのような純粋な心を持っていて……。だからこそ苦しんでたんだね……君は……」

その時アムロは彼女が好きだという男の事を思い出した。

「すると、ハマーンが好き男っていうのは……シヤア？シヤアなのか！」

アムロはそう言い放つとしばらく画面を見つめた後にこう呟いた。

「一人遠回りをして何をしているんだ……シヤア……」

その時、アムロはハマーンから貰ったディスクの事を思い出して、パソコンで開いてみた。すると、中には見慣れない拡張子のファイルが多数存在した。色々調べてやっとそのファイルの一つを開くと、どうやらサイコムシステムの概念と設計に関する事だった。しかし肝心な所は暗号になっており、容易には解析出来そうもなかった。

「これは……」

その時アムロはハマーンが別れ際に言った言葉を思い出した。

『連邦側のモビルスーツに足りないモノがね……』

「そういう事……か……」

アムロはこの暗号を解読して、新型モビルスーツのシステムに組み込みたいと思うのだが、このシステムの入手経路についてどう説明しようかと頭を悩ませていた。

「まさかハマーンに貰ったとも言えないし……うくん……拾った事にでもするかなあ……」

とても嬉しそうな、しかし困惑した表情で画面を眺めるアムロだった。その技術はやがてμガンダムへと搭載される事になるが、それはまた別のお話……。

そして、全てはハマーンの思うままに……。

完